■ 投稿論文 ■

精神保健福祉士を対象とした事例検討会の効果と効果を導く要素との関連性についての質的研究

坂　入　竜　治*

抄　録

本研究の目的は、精神保健福祉士を対象とした事例検討会のモデルを構築するために、事例検討会の効果と効果を導く要素（効果的要素）を探索することである。精神保健福祉士11名を対象に事例検討会の3側面（効果、過程、構造）についてフォーカス・グループ・インタビューを実施し、質的データ分析を行った。その結果、「効果」として≪クライエント・システムの理解の深化≫・≪専門職としての視点・態度の確認≫・≪疾病や障害に関する知識の習得≫・≪解決策≫・≪自己覚知≫・≪サポート関係の強化≫・≪組織・人材の育成≫・≪ネットワークの構築≫の8カテゴリーを抽出した。「効果」を導く「過程」の効果的要素として8カテゴリー、7サブカテゴリー、「構造」の効果的要素として6カテゴリー、15サブカテゴリーを抽出した。これにより、事例検討会の3側面の関係性が浮かび上がり、効果的な事例検討会のモデルを構築するための知見が得られた。

Keywords: 精神保健福祉士，事例検討会，効果的要素，フォーカス・グループ・インタビュー

Ⅰ　問題の背景と研究目的

精神保健福祉士（以下、PSW）が国家資格化されてから約20年が経過した。この間の精神保健医療福祉施策の変遷により、PSWの役割は精神障害者の地域移行支援から地域生活支援、更に国民の精神保健の諸問題への支援と役割が拡大している（厚生労働省2010）。

PSWはその期待に応えるべく、研鑽を重ね、専門職としての成長が求められている。

柏木ら（2000）が日本精神医学ソーシャルワーカー協会（現、日本精神保健福祉士協会）の会員を対象に行った、研修とスーパービジョンの要件に関するアンケート調査（回答者883名、回収率45.4%）によると、実践を行う上で学んでいることや工夫していることとして、研修への参加27%、専門書を読む24%、学会・講演会等への参加23%、事例検討会16%となっており、現場

＊ Sakairi, Ryuji
武蔵野大学
ルーテル学院大学大学院博士後期課程

のPSWが様々な方法を用いて工夫、努力をし、研鑽を重ねている様子が伺える。

なかでも、生活者視点に立脚し、クライエントとの「いま、ここ here and now」を重視した意思決定を重視するソーシャルワーク実践にとって、支援関係や支援過程を指し示した1事例を取り扱う意義は大きく、専門的実践を維持・向上させ、専門的性能を更新させていくことを主たる目的とする事例検討は重要である（中村 2004：24-30）。さらに、事例検討会への継続的な参加がソーシャルワーカーの成長に寄与することは樋口ら（2010）の研究でも示されており、有効な方法であると推察される。

このような認識のもと、わが国における事例検討会のモデルについては坂入（2015）が先行研究調査を行い、モデルに関する研究の到達点と今後の課題を整理している。その結果によれば、論文検索サイトに上るのは、事例報告や誌上事例研究など1事例に対する支援の検証作業が大半であり、先行研究から抽出されたモデル数は9であった（浅野 1991；宮崎 1991；横山 2002；齊藤 2002；岩間 2005；室田 2006；渡部 2007；久保・横山 2010；川村 2014）。坂入はこれらのモデルを概観し、その特徴から①インシデント・スタディ方式を採用し、ロールプレイ等を組み込むモデル、②ヒストリカル・スタディ方式を基本とし、グループ討議を通じて事例の理解を深め、援助方法について検証するモデル、③スーパービジョン方式を採用し、クライエントとの関係性やかかわりに焦点を当て、事例提供者の内省を促すモデル、の3つに大別している。

このように様々な事例検討会のモデルが紹介されているものの、中身が深化しない、内容にばらつきがみられ十分な効果をあげることができていない等の課題も散見し（齊藤 2002；渡部 2007：290-291；久保・横山 2010）、モデル自体の有効性に関する検証が実証的になされていないことが明らかになっている。このような課題を解決していくためには、事例検討会の効果と盛り込まれる内容や範囲を明確にし、それらに関わる効果的な要素を特定し位置付ける必要があると筆者は考える。

この点において、現場のソーシャルワーカーの経験から効果的とされている事例検討会の要素を探索した上で、帰納的にモデルを構築する論考は見当たらず、PSWを対象としたモデルも見当たらなかった。

そこで本稿は、PSWを対象とした事例検討会の効果と効果を導く要素を質的調査により抽出し、それらの関連性について可視化し、考察することを目的とする。

Ⅱ　本研究における事例検討の定義について

「事例」から学ぶことを示す用語には、事例検討や事例研究などがあり、その用語を使用する者によって意味が異なる（中村 2004：24）。

事例の活用目的から整理すると、多くの論者が事例研究には、①学問のための事例研究と②教育や実践のための事例研究の枠組みがあると論じている（佐藤 1998：201；岩間 2005：25-29；根本 2001：73-74；田中 2001：171）。その上で、事例検討と事例研究の違いについては様々な見解がある。佐藤（1998：201）は先述の②を目的とするものを事例検討と称して区別するとし、岩間（2005：21-22）は検討事例の種類に焦点をあて、事例検討は援助進行中の事例への援助方法の検討、事例研究は終結事例も含めて事例への取り組みの評価と別の事例にも応用できる援助の共通項を導き出すことだと述べている。また、事例検討は「アセスメント」、事例研究は「評価」の視座に基づく違いがあるとする論考もある（田中 2001：180-181）。

以上のように、様々な論者が事例検討と事例研究の概念について述べているが、統一した見解がなされていないのが現状である。

本研究が対象とする事例検討は、実践を行っているPSW同士が自分たちの専門性の向上を目的として集まること、そして、検討の対象は事例と

PSW の両者であることを想定している。それは、PSW がクライエントとの「かかわり」を基盤にして自己実現を共に歩むプロセスを重要視するため（公益社団法人日本精神保健福祉士協会 2013：14）、事例検討において検討の対象を事例か PSW かどちらか一方に焦点化することには困難が生じるためである。以上を踏まえ、本稿における事例検討は「専門職としての実践力の向上を目的に、事例提供者が関与した現在進行中または終結した事例をもとに、事例の理解、援助方法の検討を通じて専門性を点検する過程」と定義し、事例検討会はそのために意図的に用意された場と位置づけることとする。

Ⅲ　研究の方法

1．調査目的

PSW が得た事例検討会の効果と、効果を導く事例検討会に内在する効果的な要素（以下、効果的要素）を探索することを目的とした。事例検討会を構成する要素は、事例研究の構成要素（岩間 2005：22）やカンファレンスの構成要素（野村 2000；上原・野中 2007）に関する先行研究を見ても多側面に渡るため、本調査では「効果」、「過程」、「構造」の 3 側面に焦点を絞り調査を実施した。

2．調査対象・倫理的配慮

調査対象者は、東京都内の機関に勤務している PSW のうち、現に実践を行い、事例検討会に参加した経験（事例提供者または参加者）のある PSW とした。調査対象者の選定についてはスノーボール・サンプリング方式を用いた。倫理的配慮については、ルーテル学院大学研究倫理委員会の審査手続きを経て、承認を得た（申請番号 12-23　2012 年 6 月 29 日）。

調査対象者には、①インタビューの方法・内容に関する事項、②倫理的配慮に関する事項、③研究成果の発表に関する事項、④謝礼に関する事項、について文書にて説明し、同意書を得た。

次に、調査対象者の概要を示す（表 1 参照）。グループを構成するにあたり、奥川（2007：448-457）の臨床実践家の熟成過程を参考に、経験年数 10 年を基準として選別した。経験年数 10 年以上の PSW は事例検討会の経験が多く、PSW の視点からより深みのある発言が期待されるため、10 年以上の対象者のみでグループを構成した。経験年数 10 年未満の対象者については、経験年数と所属機関の種別をもとに、極力混合するようグループを構成した。

3．調査方法

フォーカス・グループ・インタビューを採用した。採用理由は、関心テーマの背景にある潜在的・顕在的な情報を把握するなど、関係者の「なまの声」を体系的に整理することができ、探索的な研究に適しているからである（安梅 2001：3）。

表 1　調査対象者の概要

グループ	ID	性別	所属機関種別	経験年数
第 1 グループ	A	女	地域	5 年 2 ヶ月
	B	女	地域	6 年 2 ヶ月
	C	女	行政	9 年 6 ヶ月
第 2 グループ	D	女	地域	4 年 2 ヶ月
	E	男	医療	5 年 2 ヶ月
	F	女	医療	6 年 2 ヶ月
	G	男	地域	9 年 2 ヶ月
	H	男	医療	9 年 2 ヶ月
第 3 グループ	I	男	医療	11年 2 ヶ月
	J	女	医療	15年 2 ヶ月
	K	女	地域	16年 2 ヶ月

インタビューは、2013年6月～2013年7月の期間に筆者が指定した公共施設の会議室にて実施した。質問項目は、①事例検討会で得た「効果」について、②効果に影響を与えていると考える「過程」や「構造」における課題や効果的要素について、とした。発言にあたっては、支援の一連の経過を振り返るヒストリカル・スタディ方式を想定して発言を促した。インタビュー内容は調査対象者の了解を得てICレコーダーに録音した。インタビュー時間は、最短が2時間28分、最長が2時間43分であった。

4. 分析方法

分析方法は、安梅（2001：50-63）と佐藤（2008：91-108）の方法を参考に質的データ分析を行った。まず、得られた質的データから逐語録を作成した。その際に、発言者と発言の順番が分かるよう通し番号を付した。次に、質問項目に沿って重要な内容である「発言」を抽出し、帰納的にコーディングを行った。そして、抽出した「発言」を類似した意味内容ごとにまとめ、「カテゴリー」を抽出した。

なお、事例検討会の展開過程は先行研究（横山2002；齊藤2002）から共通性が高いことが確認されたため、「過程」のコーディングは事前に枠組みを整理した。枠組みは、横山の5段階の過程（①ケース紹介及び援助の概要、②事実確認・情報整理、③課題設定、④課題の検討、⑤まとめ）をもとに、齋藤の10段階の過程（①役割の決定、②提出事例の準備、③事例のプレゼンテーション、④検討課題の確認、⑤課題にそった質疑応答―事例・アセスメントの共有化―、⑥検討課題の再焦点化、⑦⑥に基づく意見交換、⑧事例提出者からのまとめ、⑨司会者からの解説とまとめ、⑩課題と次回への宿題の確認）から②、④、⑤を追加することで展開過程を8段階とし、段階ごとに効果的要素を抽出する枠組みとした。その上で、アセスメントの視点の枠組みについては、PSWがどのような視点をもって事例をアセスメントしているのかをより詳細に抽出するために帰納的にコーディングを行い、サブカテゴリーを抽出した（表3参照）。

コーディング後、効果的要素と位置付ける「カテゴリー」の絞り込みは、3つのグループの共通性のほか、「特定の背景をもつグループの意見」に留意しながら「発言」数が2以上、かつ発言者が2人以上であることを基準として採用した。分析には「MAXQDA 11」を使用した。

Ⅳ　調査結果

質的データ分析の結果を述べる。以下、「効果」のカテゴリー名を≪　≫、サブカテゴリー名を《　》と記載し、「過程」と「構造」のカテゴリー名を【　】、サブカテゴリー名を〔　〕と記載する。

抽出された事例検討会の「効果」は8カテゴリー、16サブカテゴリーであった。「効果」をミクロレベル、メゾレベルに分類したところ、ミクロレベルの効果に関する発言数は68、メゾレベルの効果に関する発言数は19であった（表2参照）。

「過程」における効果的要素は8カテゴリー、7サブカテゴリーであった（表3参照）。「過程」に関する発言において、極端な発言数の偏りは見られず、課題の再焦点化までの過程前半に発言が多い傾向にあった。また、アセスメントの共有（視点）においては、〔クライエントの意思（希望）〕、〔ストレングス〕の2つの発言数が若干多く見られた。

「構造」における効果的要素は6カテゴリー、15サブカテゴリーであった（表4参照）。【構成員】、【参加者の役割】、【助言者の役割】、【資料】の発言数が多い結果となった。

Ⅴ　分析結果の考察

ここでは3側面の分析結果のなかで、特徴的な効果と効果的要素、PSWとしてより意識する視点・態度として示唆されたものに絞って考察を進める。その後、Ⅵの総合考察において、事例検討会の効果と効果的要素との関連性について俯瞰的に考察する。

表２　事例検討会の「効果」に関するカテゴリーと発言数

	カテゴリー	サブカテゴリー	総発言数
ミクロレベルの効果	クライエント・システムの理解の深化		**12**
		資料作りの過程での事例への新たな気づき	（5）
		他者の視点が入ることで事例を多面的に理解する	（7）
	専門職としての視点・態度の確認		**24**
		固有性を尊重し、個人として捉える	（5）
		本人主体・自己決定を尊重する	（4）
		病気ではなく人をみる	（3）
		あらゆることを社会資源として捉える	（3）
		ソーシャルワーカーとしての自覚をもつ	（3）
		共感的態度を身に付ける	（2）
		対人間同士の関係性を意識する	（2）
		偏見や差別に向き合う	（2）
	疾病や障害に関する知識の習得		**3**
	解決策		**12**
		新しいやり方を発見する	（8）
		支援が具体的な行動として示される	（4）
	自己覚知		**13**
	サポート関係の強化		**4**
	ミクロレベルの効果に関する発言数の合計		**《68》**
メゾレベルの効果	組織・人材の育成		**8**
		組織の機能に沿った業務展開を学ぶ	（3）
		同僚の実践を知り、PSW の価値を組織で共有する	（5）
	ネットワークの構築		**11**
		顔見知りになり支援・連携がしやすくなる	（6）
		他機関の機能や方針を知る	（5）
	メゾレベルの効果に関する発言数の合計		**《19》**

表３　事例検討会の「過程」における効果的要素（カテゴリー）と発言数

カテゴリー	サブカテゴリー	総発言数
提出事例の準備		**5**
事例紹介・援助の概要		**7**
検討課題の確認		**9**
事実確認・情報整理		**7**
アセスメントの共有（視点）		**28**
	治療歴	（3）
	家族を含む社会的人間関係	（4）
	生育歴と生活歴	（4）
	住環境	（2）
	経済的状況	（2）
	クライエントの意思（希望）	（7）
	ストレングス	（6）
課題の再焦点化		**7**
課題の検討		**4**
まとめ		**3**
「過程」における効果的な要素に関する発言数の合計		**《70》**

表４　事例検討会の「構造」における効果的要素（カテゴリー）と発言数

カテゴリー	サブカテゴリー	総発言数
構成員		**32**
	人数	（10）
	人選	（22）
事例提供者の役割		**13**
	検討課題を明確にして発表する	（7）
	学ぶために柔軟な姿勢で臨む	（6）
参加者の役割		**21**
	協力者として質問する	（14）
	経験に基づくアイディアを提供する	（7）
助言者の役割		**24**
	検討会での支持的な姿勢	（4）
	検討会で適切なコメントをする	（9）
	全体を見渡した舵取り役	（8）
	助言者も事例を出すことで模範を示す	（3）
規範		**10**
	継続した参加による凝集性の高まり	（3）
	会の主旨・ルール	（7）
資料		**40**
	フォーマット	（18）
	盛り込む内容	（10）
	事前配布	（12）
「構造」における効果的な要素に関する発言数の合計		**《140》**

1.「効果」に関する考察

「効果」の考察として、ミクロレベルほど多くはないものの、メゾレベルの効果が抽出された。事例検討会のモデルには、ミクロレベルの効果を意識したモデルが多く（浅野 1991；宮崎 1991；横山 2002；室田 2006；渡部 2007）、明確に「組織を育てる」というメゾレベルの効果について記述があるのは多職種で構成される会を想定した岩間（2005：41-42）のモデルのみであった。その意味において、PSW で構成される同質職種による事例検討会においてもメゾレベルの効果が２つ抽出されたことは意義深い。なお、**≪組織・人材の育成≫**は主として職場内事例検討会における効果であり、**≪ネットワークの構築≫**は多機関の PSW で構成される職場外事例検討会の限定的な効果である。

ミクロレベルの効果である**≪自己覚知≫**は特に発言数が多かった。*「実は自分が揺れていることに気づいた（F-11）。」*、*「自分がこういう考えに偏りやすいことを知った（H-5）。」*、*「関わりを振り返り、自分がどうしてそういうことをしたのか考えた（I-8）。」*等、これらの発言から事例検討会には、①事例に対する自己の心情の原因を探り、直面化することができる、②事例を出すことで自分自身を客観視することができる、③関わりの検証を行うことで自分の傾向や支援の根拠を考えることができる、等の**≪自己覚知≫**の効果があり、PSW が事例検討会でより感じている効果であると推察された。

次に、特徴的な効果として、**≪疾病や障害に関する知識の習得≫**が挙げられる。この効果に関する発言は地域の事業所に勤める PSW から強調された。PSW は学問的基盤を社会福祉学においているものの、精神障害者は疾病と障害を併せ持っていることから、その生活支援において精神医学の知識は不可欠である。しかし、医学知識を日々の実践の中で活用できるかは所属する機関の機能や業務によって差が生じてくるであろう。その意

味では、病院に勤務するPSWより地域で働くPSWがより**≪疾病や障害に関する知識の習得≫**を事例検討会の効果として感じていることは頷ける。

また、**≪専門職としての視点・態度の確認≫**のうち《**本人主体・自己決定を尊重する**》、《**病気ではなく人をみる**》、《**あらゆることを社会資源として捉える**》、《**偏見や差別に向き合う**》の4つのサブカテゴリーはPSWとしてより意識する視点・態度であることが推察された。我が国は精神障害者を「病者」と位置付け、永らく入院治療の対象とし、隔離収容してきた歴史がある。その結果、精神障害者に対する誤解や偏見、差別的な感情を生み出し、精神障害者の人権問題に大きな影響を与えてきた事実がある（田村 2009：81）。精神障害者は疾病と障害を併せ持っているため、ときに治療が優先され、治療者の価値観が重視される。これに対してPSWは、精神障害者を病者ではなく、精神疾患による生きづらさを抱えた生活者として理解する視点に立っている。かかわりにおいては、精神障害者自身がどうしたいかを自分で選び、決め、実現に向けて歩むことを支援する姿勢を保ち、自己決定を尊重する（田村 2009：80）。このような歴史的背景から導き出されたPSWの視点・態度は、本調査において抽出された《**本人主体・自己決定を尊重する**》、《**病気ではなく人をみる**》、《**あらゆることを社会資源として捉える**》、《**偏見や差別に向き合う**》の4つのサブカテゴリーと重なるものであり、PSWがより重視する視点・態度であると考える。

2.「過程」における効果的要素に関する考察

「過程」の考察として、【課題の再焦点化】までの過程前半に発言が多く、現場のPSWが重要な要素であると考えていることが示唆された。特に、【事例紹介・援助の概要】の段階は、説明に多くの時間を割くと後半の検討に充分な時間がかけられなくなるとの発言が多かった。先行研究では、事例検討会の展開過程をいくつかの段階に分け、均等に記述しているが（横山 2002；岩間 2005：65-69；渡部 2007：14-23 久保・横山 2010）、本調査からは事例検討会の展開過程の前半が特に重要であることが浮かび上がったといえる。また、事例を理解し、課題を検討するために必要な適度の情報量が求められており、時間短縮と参加者各自の考えをまとめておくためにも資料の事前配布が効果的であると示唆された。そして、必ず【検討課題の確認】を意識して行いながら【事例紹介・援助の概要】の説明を進めていく必要がある。この点については、先行研究でも同様の記述がなされているが（齊藤 2002；横山 2002；岩間 2005：85-92）、資料の事前配布が効果的であるか否かについてこの段階において明確に論じているものは見当たらなかった。

【事実確認・情報整理】は、事例提供者と参加者による相互的な対話を通じて、事例への理解を深めていく段階であるが、効率よく進めないと課題の検討時間が充分に確保できないことになる。先行研究では、参加者は事例の全てを明らかにするための質問や参加者自身の意見、事例提供者への批判的な言動をするのではなく、対人援助の観点から事例の本質を明らかにする質問をすることの重要性が指摘されている（齊藤 2002；横山 2002；岩間 2005：96-99：久保・横山 2010）。事例検討会の各構成員がこの点について共通認識していく仕組みが必要となるであろう。

【アセスメントの共有（視点）】の段階では、本調査では、7つのサブカテゴリーが抽出され、これら事例を理解するための視点は、身体的・心理的・社会的な包括的アセスメントの視点である（福島 2002：13）。本調査では、〔クライエントの意思（希望）〕、〔ストレングス〕の2つに対し発言数が若干多く見られた。精神障害者は疾病の影響、差別や偏見による自己実現の困難などから自己評価や自尊感情の低下も見受けられる。そのため、PSWはクライエントの自己決定を尊重し、ストレングスを見い出し強化していく。これらはソーシャルワーカー全般に言えることではあるが、【アセスメントの共有（視点）】においてPSWが強く意識する視点であると考えられる。

3.「構造」における効果的要素に関する考察

「構造」の考察として、【構成員】、【参加者の役割】、【助言者の役割】、【資料】についての発言数が多く、より強く効果との関連性が意識される要素であることが推察された。

まず【構成員】であるが、〔人数〕は本調査において6～8人ぐらいが適切と感じている発言が多くみられた。処遇会議や委員会などの課題グループについて論じているToseland・Rivas（＝2003：81-82）は、グループの規模が大きくなると、メンバーがコミュニケーションをする機会も時間も少なくなることを指摘しており、岩間（2005：58）もグループダイナミックスを活用するには10人前後が最適と述べていることから、10人程度の人数で実施することが効果的であると言えよう。〔人選〕については、本調査では構成員が職場内か職場外かによる違いの是非に焦点は当てていないが、調査対象者の経験として、職場外の事例検討会は多様な人選になり、多機関のPSWが参画することで、事例をより多面的に捉える効果を感じている。先行研究においては渡部（2007）のモデルを除いて、特に人選についての基準は示されていないが、本調査では人選が事例検討会において重要な要素であることが浮かび上がった。

次に【参加者の役割】だが、本調査では〔協力者として質問する〕、〔経験に基づくアイディアを提供する〕の2つのサブカテゴリーが抽出された。*「（参加者は）傍観者になってはいけない（G-27）。」*、*「（事例提供者が）なぜそこをテーマと思ったのか、（参加者は）そこに関心を払って投げかける（E-9）。」*等の発言より、参加者には事例提供者が課題を達成することに協力し、質問する役割があると語られた。そして、単に参加者の経験を話すのではなく、事例提供者の課題達成に有益となる〔経験に基づくアイディアを提供する〕ことが重要だと語られた。岩間（2005：61）も参加者に求められる4つの姿勢として、「考える」「表現する」「受け止める」「気づく」を挙げていることからも、事例検討会における相互作用を促進する上で参加者役割は重要な要素となる。

【助言者の役割】については4つのサブカテゴリーが抽出され、先行研究（岩間2005：64）と内容は近い。しかし、本調査で抽出された〔助言者も事例を出すことで模範を示す〕については先行研究には見当たらず、このサブカテゴリーは経験年数10年以上の調査対象者で構成されたグループにおいてのみ抽出された要素であった。調査対象者の経験から、上司や助言者的な立場にある者が事例提供者としてまず模範を示すことで、参加者は資料作成や課題の立て方などを学び、経験が長いPSWであっても実践において悩みや葛藤を抱くことを参加者が知ることで、参加者は安心感を抱き、自身の実践を事例検討会に出してみようとするとの発言であった。特定のグループから抽出された要素であるため、一般化できる要素であるか更なる研究が必要と考える。また、本調査では、提出事例作成における助言者の関与について、関与はないとの発言が多かったためサブカテゴリーが抽出されなかったが、筆者は自身が事例提供者を経験した際に、事例作成時から助言者に指導を仰いだ経験があり、それは非常に有用であった。この点についても更なる研究は必要と考える。

【資料】については、本調査では〔フォーマット〕の存在と〔事前配布〕が効果的であると示唆されており、先行研究においても様々なフォーマットが紹介されている（宮崎1991；横山2002；岩間2005：165-184；室田2006；渡部2007：330-331）。資料の事前配布については、個人情報保護の観点からも慎重をきたすべき事項であり、事前に配布する際にはその送付方法や取扱いについての取り決めが事例検討会の構成員に周知されている必要があろう。また、事前配布が効果的であるためには、参加者が資料を事前に必ず読み込んでおくことを担保する工夫が求められる。

フォーマットに〔盛り込む内容〕については、本調査では、①題名（テーマ）と課題（事例提供者が検討したいこと）、②事例概要（家族状況、経済状況、生育歴、治療歴など）、③支援の経緯

（本人や家族の思い、支援の概要と介入の根拠など）、④今後の支援方針（具体的な行動）、の4点が共通意見として出されたが、概ね先行研究で取り上げられている内容と一致していた（宮崎1991；齊藤2002；横山2002；岩間2005：165-184；室田2006；渡部2007：330-331）。支援経緯の記述にあたっては、PSWとしてのかかわりの理由や根拠を記述することの必要性が発言され、この点については福島（2006）も、事例の深い理解にとどまらず、ソーシャルワーク実践の具体的内容の検討をすることが重要と指摘していることからも、かかわりの理由や根拠を記述することは重要な要素であろう。

以上、特徴的な効果と効果的要素、PSWとしてより意識する視点・態度として示唆されたものについて3側面ごとの考察を行った。

Ⅵ　事例検討会の効果と効果的要素の関連性の総合考察

ここでは、前節の3側面の考察を踏まえ、事例検討会の効果を導き出すために効果的要素がどのように関連しているのかに焦点を当てた総合考察を行う。総合考察のイメージは図1の通りであり、事例検討の展開過程に沿って効果との関連性の考察を行う。

1.「効果」：≪クライエント・システムの理解の深化≫《資料作りの過程での事例への新たな気づき》を導き出す要素について

事例検討会を実施するにあたり、「過程」：【提出事例の準備】の段階を経る。この段階では、*「どういう風に簡潔にまとめればいいのだろう（B-30）。」*、*「伝えたいことを凝縮してまとめなければいけない（F-2）。」*等の発言から、①検討の焦点の設定（課題設定）、②作成の参考となるフォーマットの存在、③参加者が短時間で理解できるよう事例概要・支援経過をまとめる、ことが求められている。

これに対し、「構造」：【資料】〔フォーマット〕があることの利点として事例提供者が事例概要について最低限話すべき情報の指針となることが示唆されており、〔盛り込む内容〕が〔フォーマット〕に定められていることで、提出事例をまとめながら自身の支援を振り返る際の枠組みが得られる。こうした資料作りの過程を経て、*「自分の中で整理ができてくる（G-6）。」*、*「こういうところが聞けてなかったかもしれない（I-10）。」*、*「発見とかがあったりする（A-21）。」*等の発言にあるように、①支援の実態を可視化させ客観視させる、②過去から現在の文脈のなかでクライエントを捉えなおす、③クライエントを理解するために必要な情報の不足に気づく、といった「効果」：**≪クライエント・システムの理解の深化≫《資料作りの過程での事例への新たな気づき》**が導き出されよう。

2.「効果」：≪クライエント・システムの理解の深化≫《他者の視点が入ることで事例を多面的に理解する》ならびに「効果」：≪疾病や障害に関する知識の習得≫を導き出す要素について

事例検討会には、参加者の複数の視点から事例を捉えなおす過程が含まれる。*「他の人の意見を聞いたり、違う職場の方の話を聞かないと一つの方向性でしか考えられなくなる（A-2）。」*、*「医療現場のPSWから、その方の過去とか入院歴とかを知っておくのも大事だよっていう指摘があった（A-23）。」*、*「自分より経験が長い方はそういうふうに考えられるんだ（B-39）。」*等の発言より、経験年数の長いPSWや多機関のPSWなどが参加することで、事例検討会には**《他者の視点が入ることで事例を多面的に理解する》**効果がある。

この効果を導き出すためには、「過程」：【事例紹介・援助の概要】【検討課題の確認】【事実確認・情報整理】【アセスメントの共有（視点）】を経る必要がある。この過程は事例検討会全体では前半部分にあたり、先行研究（齊藤2002；岩間2005：85-107：久保・横山2010）においても、

この前半部分は事例提供者と参加者が対話を通じて相互作用を開き、事例のイメージを共有化していく段階とされている。

この前半部分の段階では、*「事例紹介に時間を要し、肝心の検討ができない（C-22）。」*、*「課題の検討よりも（事実確認に要する時間が）多くなってしまう（F-13）。」*等の発言から時間がかかりすぎる傾向があり、後半の過程に影響を及ぼすことが示唆された。時間がかかる要因としては、*「情報が少ない（A-27）。」*、*「情報が多すぎる（J-49）。」*、*「詳細を理解するための質問のやりとりが長い（D-13）。」*、*「これ知るの必要かな（質問の意図が不明）（K-60）。」*との発言から、①資料に記載されている、もしくは記載されていない情報を理解するための質問に時間がかかる、②参加者の質問内容が的を得ていない（質問の質の問題）、ことが示唆された。

これらの課題を解消するために、「構造」:【資料】〔フォーマット〕があることで、①参加者が一目で各情報が分かる、②限られた時間の中で参加者発言の質を高めることができる、③時間短縮につながる、④検討のための土台作りになる、との発言が出され、資料の枚数についてはA4で1～2枚が効果的と示唆された。また、資料の〔事前配布〕が効果的との意見が多数を占め、①業務時間内で行うための時間短縮につながる、②遅刻者も検討に参加しやすい、③参加者が前もって疑問や意見を整理できるため、事例検討会での議論や検討が早く進む、との理由が出された。

しかしながら、【資料】の要素だけでは不十分であり、事例検討会の構成員の役割についても多くの発言がなされた。事例提供者と参加者による相互的な対話（質疑応答）を展開していくためには、「構造」:【事例提供者の役割】として、〔検討課題を明確にして発表する〕、〔学ぶために柔軟な姿勢で臨む〕ことが重要であり、「構造」:【参加者の役割】として、事例提供者の課題達成のために〔協力者として質問する〕姿勢が求められている。そして、相互的な対話（質疑応答）を促進していく「構造」:【助言者の役割】として、〔検討会での支持的な姿勢〕、〔検討会で適切なコメントをする〕、〔全体を見渡した舵取り役〕が求められていた。

このような構成員の役割に加えて、構成員の相互作用を開かれたものとしていくために、「構造」:【規範】の必要性が示唆された。〔継続した参加による凝集性の高まり〕は、事例提供者を含む参加者間の協力的な関係を構築していく上でも重要な要素となり、事例検討会が有効に機能するためには、〔会の主旨・ルール〕も必要な要素であり、ルールという形で明文化されていなくても、事例検討会の主旨が参加者間に浸透していることの重要性が認識された。

相互作用を保つためには「構造」:【構成員】〔人数〕も重要な要素であり、10人程度で実施することが効果的である。

また、「効果」:**≪クライエント・システムの理解の深化≫《他者の視点が入ることで事例を多面的に理解する》**ならびに「効果」:**≪疾病や障害に関する知識の習得≫**を導き出す「構造」の要素として【構成員】〔人選〕が大きな影響を与えていることが浮かび上がった。調査対象者の経験として、職場外の事例検討会は多様な人選になり、多機関のPSWから事例を客観的にアセスメントしてもらうことで視点の広がりを感じている。特に医療機関に所属するPSWに比べて地域の事業所に所属するPSWの方が**≪疾病や障害に関する知識の習得≫**を事例検討会の効果として感じており、その効果を出すためには人選において医療的視点も持ち合わせているPSWや助言者を構成員に加えることが効果を導き出す要素となる。

3.「効果」:≪解決策≫《新しいやり方を発見する》《支援が具体的な行動として示される》を導き出す要素について

事例提供者は、*「手は尽くしたけれども、どうしたらいいかわからない（F-3）。」*、*「今度は違う方法もあることが分かればいいと思う（F-8）。」*等の発言より、事例検討会に解決策を求めている。参加者や助言者から意見をもらうことで、

「そういう方法もあったのか（I-34）。」、*「どのタイミングでどう動いたらいいのか具体的に分かるといい（F-6）。」*といった《**新しいやり方を発見する**》《**支援が具体的な行動として示される**》ことが事例提供者にとっての効果である。

これらの効果を出すためには、事例検討会の前半部分において、事例への理解を深めた後、「過程」:【課題の再焦点化】【課題の検討】を経る必要がある。事例検討会の前半部分を経て、事例提供者は検討課題が既に解決に導かれていたり、検討課題を再考する余地があることに気が付いていく。*「課題自体を検討。そこを整理して進むとひっかかってこなかった（B-41）。」*との発言のように、①検討課題を再考する時間をもつこと、②検討課題を再考することに参加者が協力的、支持的であること、が効果を導き出す要素となり、この作業を行うことでその後の検討の焦点がより定まっていくことに繋がる。検討の焦点が定まると具体的な課題の検討の段階に入るが、この段階では*「支援の方法をPSWが考えられているか。方法まで落とし込めるか（E-27）。」*とあるように課題を解決していくための方法を具体的に検討することが効果を導き出す要素となる。

この「過程」:【課題の再焦点化】【課題の検討】の段階において効果的とされる「構造」の要素としては、先述した「構造」:【構成員】【事例提供者の役割】【参加者の役割】〔協力者として質問する〕【助言者の役割】【規範】に加えて、「構造」:【参加者の役割】〔経験に基づくアイディアを提供する〕が効果的要素として浮かび上がった。この要素は、事例提供者の課題達成のために有益となるであろうアイディアを参加者が提供することであり、これは福島（2002：18）が、援助者の援助の仕方を評価する視点として、①援助の方向性、②援助の内容、③援助の方法、④援助の範囲の適切さ等の4点を挙げているが、そのうちの②や③の援助の選択肢の幅を広げるために効果のある要素と言えるだろう。

4.「効果」:≪専門職としての視点・態度の確認≫ならびに≪自己覚知≫、≪サポート関係の強化≫を導き出す要素について

本調査では、事例検討会の様々な効果が抽出されたが、上記3つの「効果」については、事例検討会全体の「過程」を通じ、最後の「過程」:【まとめ】の段階で言語化することにより効果を実感できるものと考える。

事例検討会は、事例を素材にしながら事例提供者を含む参加者間の対話による相互の学びの過程である。先述した「構造」:【構成員】【事例提供者の役割】【参加者の役割】【助言者の役割】【規範】といった効果的要素が複雑に絡み合いながら事例検討会は進む。*「一人で抱え込まなくてもいい（C-10）。」*、*「助け合おう（I-14）。」*といった参加者間の**≪サポート関係の強化≫**が生まれ、相互的な対話を通じて**≪自己覚知≫**を深め、**≪専門職としての視点・態度の確認≫**を行う。

「効果」は目に見えて分かりやすいものから、見えづらく分かりにくいものまである。特に**≪専門職としての視点・態度の確認≫**や**≪自己覚知≫**は、参加者や助言者からの問いかけが気づきの契機になったり、自ら言語化する作業を繰り返し行うことで自身が「効果」として実感していくものであろう。

そのためにも「過程」:【まとめ】の段階で、①助言者が課題の検討結果を要約し、成果を示す、②事例提供者、参加者各自が検討会での成果を言語化する、など事例検討会で得た成果物を明確にすることが効果を導き出す要素となり得るのではないかと推察された。

5.「効果」:≪組織・人材の育成≫ならびに≪ネットワークの構築≫を導き出す要素について

この2つの「効果」は、「構造」:【構成員】〔人選〕に影響を受けるものであり、職場内であれば**≪組織・人材の育成≫**の効果を発揮し、職場外であれば**≪ネットワークの構築≫**が期待できる。

職場内のPSWで事例検討会を行うことで、《**組織の機能に沿った業務展開を学ぶ**》ことがで

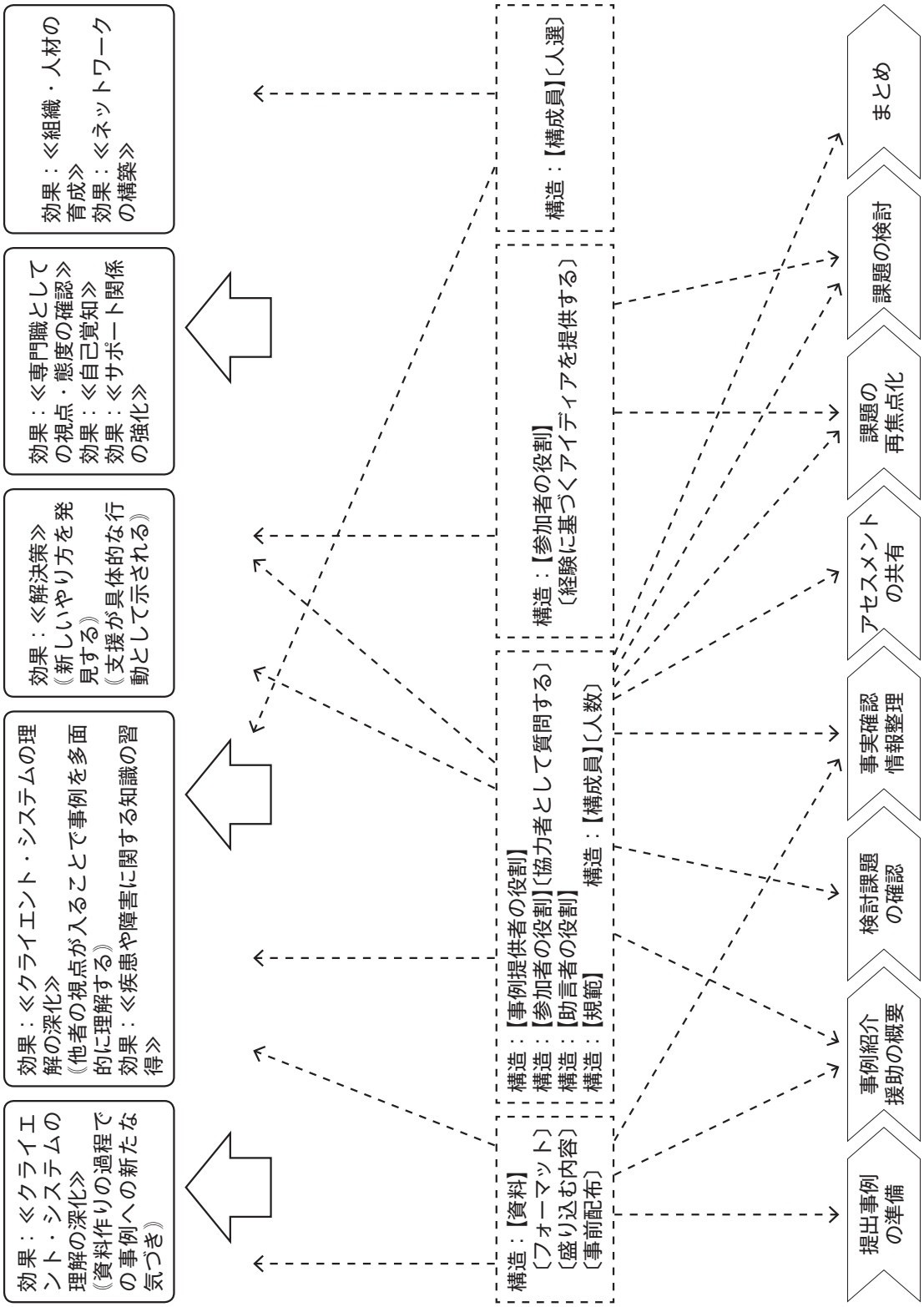

図１　効果と効果的要素の関連性のイメージ図

きるだけではなく、**《同僚の実践を知り、PSW の価値を組織で共有する》**ことで、業務遂行の過程に PSW の価値を織り込み、体現していくことにつながる。一方、職場外の PSW で事例検討会を行うことで、**《顔見知りになり支援・連携がしやすくなる》**ことに加えて、**《他機関の機能や方針を知る》**ことで、その機関の特徴や支援の方法などを理解し、機関同士の信頼関係が強化されることになる。

Ⅶ　本研究の成果と限界・今後の課題

本研究の成果は次の3点である。第1に、PSW が事例検討会で得た「効果」と「効果」を導く「過程」、「構造」における効果的要素が抽出されたことである。第2に、それら3側面の関係性が浮かび上がったことである。第3に、PSW が事例検討会において PSW としてより意識する視点・態度が示唆されたことである。これらの成果は、今後、事例検討会のモデルの構築、有効性の検証につなげるための知見となる。

一方で、本調査で得られた知見を一般化することには限界がある。その理由は2つある。1つは、本調査は東京都内の機関に勤務しているごく一部の PSW のみを対象に行っていること。もう1つは、本調査による知見が医療や障害福祉サービスに関わる PSW の主観的な効果と効果的要素であることである。

また、質的データの分析者が筆者1名であり、指導教授のコンサルテーションを受けたとはいえ筆者の主観が調査結果に影響を及ぼす可能性が完全に拭いきれない点も限界である。本調査の妥当性の検証には更なる研究が求められる。

今後の研究課題としては、事例検討会の「効果」の測定が挙げられる。事例検討会が効果的であるためには、「効果」と「効果」を導き出す「過程」、「構造」の要素との関連性について量的な実証的研究が必要となる。そのためには、調査で抽出された複数の「効果」同士の構造を整理し、事例検討会のモデルを理論化した上で、「効果」や効果的な事例検討会の展開（効果的要素の配置）を測定する指標の作成が求められる。

謝辞

本稿は、筆者のルーテル学院大学大学院 2013 年度学位論文（修士）「事例検討会を構成する効果的な要素の探索－精神保健福祉士を対象としたフォーカス・グループ・インタビューより－」の一部を大幅に加筆・修正したものである。インタビューにご協力頂いた PSW の皆様に心より御礼申し上げる。

＜参考・引用文献＞

安梅勅江（2001）『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法　科学的根拠に基づく質的研究法の展開』医歯薬出版.

浅野正嗣（1991）「造形法を用いたグループスーパービジョン」『ソーシャルワーク研究』17（2），107-113.

福島喜代子著・地域福祉権利擁護事業従事者の実践力強化研修事業　研修企画評価委員会（2002）『地域福祉権利擁護事業における事例検討の進め方』社会福祉法人全国社会福祉協議会.

福島喜代子（2006）「スーパービジョンにおけるコミュニケーション・スキルアップ―ソーシャルワーク実践スキルを向上させるために―」『ソーシャルワーク研究』32（3），43-49.

樋口明子・村松愛子・久保田純・ほか（2010）「ソーシャルワーカーの成長からみる事例検討会の意義―「人間：環境：時間：空間の交互作用」を実践するために―」『ソーシャルワーク研究』36（3），66-71.

岩間伸之（2005）『援助を深める事例研究の方法［第2版］―対人援助のためのケースカンファレンス』ミネルヴァ書房.

柏木昭・松永宏子・荒田寛・ほか（2000）「精神保健福祉士のスーパービジョンおよび研修の体系化に関する研究」『精神保健福祉』31（1），39-46.

川村博文（2014）「ソーシャルワーカーの事例検討会に関する考察：何を言語化するか、何を検討するか」『社会事業研究』（53），22-25.

公益社団法人日本精神保健福祉士協会編（2013）『公益社団法人日本精神保健福祉士協会　生涯研修制度共通テキスト第2版』中央法規.

厚生労働省（2010）「精神保健福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」（http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0331-21a.pdf，2012.1.7）.

久保昌昭・横山正博（2010）「事例検討会を通じたソーシャルワーカーの実践力向上に関するモデル作成

の試み―ソーシャルワーク機能を実践で生かすために―」『山口県立大学学術情報』3，73-80.
宮崎法子（1991）「母子福祉領域における事例検討の方法―母子寮における事例検討の進め方についてのいくつかの提案―」『ソーシャルワーク研究』17（2），97-106.
室田人志（2006）「事例研究法の試みと援助者の“ゆらぎ”の克服～事例研究法等によるエビデンスの明確化から～」『同朋福祉』12，225-242.
中村和彦（2004）「第３章　事例研究・事例検討の意味」日本社会福祉実践理論学会監修・米本秀仁・高橋信行・志村健一編　『事例研究・教育法―理論と実践力の向上を目指して―』川島書店，24-30.
根本博司・高倉節子・高橋幸三郎編（2001）『初めて学ぶ人のための社会福祉調査法』中央法規.
野村豊子（2000）「ケアカンファレンスの理論と実際（その２）：課題グループの視点から」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』2（2），39-44.
奥川幸子（2007）『身体知と言語―対人援助技術を鍛える―』中央法規.
齊藤順子（2002）「OGSV（奥川グループスーパービジョン）モデルを用いた事例検討の方法―実践する力を育む事例の活用の仕方―」『ソーシャルワーク研究』28（3），196-203.
坂入竜治（2015）「事例検討のモデルに関する実証的研究の動向と課題―ソーシャルワーカーの実践力向上のための事例検討に焦点をあてて―」『武蔵野大学人間科学研究所年報』(5）,119-133.
佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法―原理・方法・実践―』新曜社.
佐藤豊道（1998）「ケース研究」久保紘章ほか編『ケースワーク　社会福祉援助技術各論Ⅰ』川島書店，201.
田村綾子（2009）「第２章第６節『精神保健福祉士』になるためには」柏木昭・荒田寛・佐々木敏明編『第４版これからの精神保健福祉　精神保健福祉士ガイドブック』へるす出版，78-86.
田中千枝子（2001）「第Ⅲ部第１節　事例研究の意味と方法」社会福祉教育方法・教材開発研究会編　『新社会福祉援助技術演習』中央法規，171-186.
Toseland,R.W. and Rivas,R.F.（1998）An Introduction to Group Work Practice,Allyn & Bacon（= 2003，野村豊子監訳，福島喜代子・岩崎浩三・田中尚・鈴木孝子・福田俊子訳『グループワーク入門　あらゆる場で役に立つアイデアと活用法』中央法規.）
上原久・野中猛（2007）「ケアマネジメントにおけるケアカンファレンスの効果」『日本福祉大学社会福祉論集』(116)，53-62.
渡部律子（2007）『基礎から学ぶ気づきの事例検討会―スーパーバイザーがいなくても実践力は高められる―』中央法規.
横山正博（2002）「ソーシャルワーカーのための事例検討方法論」『山口県立大学社会福祉学部紀要』8，1-8.

Qualitative Study on the Relationship between Effects and Effective Components of the Case Study Meeting for Psychiatric Social Workers

Ryuji Sakairi

This study aims to explore components (effective components) leading effects of the case study meeting. Focused group interviews with 11 psychiatric social workers were conducted in regard to three aspects (effect, process, structure) of the case study meeting and qualitative data analysis was also conducted. As a result, 8 categories were extracted as “effects” of the case study meeting: “understanding of client systems,” “perspectives and attitudes as professionals,” “knowledge about diseases and disorders,” “solution,” “self-awareness,” “mutual support,” “organization / professional training,” and “networking.” 8 categories and 7 subcategories were also extracted as effective components in “process.” Moreover, 6 categories and 15 subcategories were extracted as effective components in “structure.” Thus, the relationship of the three aspects of the case study meeting was suggested.

Keywords: psychiatric social worker, case study meeting, effective components, focus group interviews